IATSS三十周年によせて

## 交通安全意識の高揚を望む

景山克三　日本大学名誉教授

1920年八幡市（現北九州市）に生れる。43年日本大学理工学部卒業、海軍技術科士官を経て、日本大学理工学部に入る。講師、助教授を経て、61年教授。その間、二輪車の研究によって工学博士。90年名誉教授。

長い間住み慣れた東京を離れて、この千葉県佐倉市に移り住んでから、もう25年以上になるが、移り住んだはじめの頃、非常に驚いたことがあった。それはこの土地の人々の交通安全に関する関心が東京とは著しく異なることだったのである。東京だって、いろいろな人がいるし、必ずしも模範的な人ばかりではないことはもちろんだが、こちらの人々は交通安全に無関心な人がきわめて多いことに気づいたのである。外出する度に、ドキッとさせられたり、カーッ！と怒ったりすることの連続だった。それほど、交通ルールを無視する人が多かったのである。自動車は交差点でも、右折・左折の信号を出さないのがきわめて多い。このことは現在でも少しも変わっていない。向こうから来る車が信号を出さずに突然左折したり右折したりしてハッ！とさせられることの連続だった。左車線を走っていた前の車が、突然右折したりして、ハッ！とさせられるのは毎日のことだった。夜になると、違反行為はますますすさまじいものになる。夜遅く電車を降りて駅前の交差点を渡ろうとすると、交通信号は赤になっているのに、大型トラックが何台も信号を無視して突っ走り、危なくてとても渡れない。それらのトラックの群れに混じって女性の運転する乗用車までが完全な信号無視で突っ走っていく。こういうことは現在も続いている。

こういう有り様を見る度に怒っていたのだが、それが毎日のこととなると、怒ってばかりもいられなくなる。つまり違反行為が日常化してくると、それが当たり前のことになってしまうのだから恐ろしい。私のように、他の土地で育ったものでもそうなのだから、この土地で育って他の土地のことを知らない人は、ますますこれが当たり前のことと思ってしまうに違いない。

今でも、たまに東京に出て、東京の町を車で走ってみると、みんな行儀よく走っているのに感心させられる。それと同時に、自分がいつの間にか悪い空気に馴染んでしまっていることに気づくのである。一般に環境に馴染むということは必要なことではあるが、悪い環境に馴染むことは決してあってはならないことだろう。

私の住んでいる千葉県は、全国でも交通事故の多いことでは有名な県である。現在でも都道府県別に見ると、事故の多いことでは千葉県はワーストファイブに入る県である。その中に住んでいる私には「さもあらん」と思える。警察は、交通事故の件数や死者数を挙げて、それを県の面積や自動車の台数と結びつけて足れりとするのではなく、県民の安全意識の欠如という点にもっと注目して、安全意識を高めるための努力をしてもらいたいものだと思う。